

熊本方言の指定助動詞 The Copula in Kumamoto Dialect

児玉 望

Kodama Nozomi

§ 1 . はじめに

日本語の活用語の中で、指定助動詞は語幹交替が見られる点でユニークである。これらの語形は、二つの連用形二、デ(< *ニテ) がそれぞれ存在動詞アリと縮約することによって成立したと考えられ、東京方言では前者がナ、ナラ(連体形、仮定形) 後者がダロ(ウ) ダッ(タ)、ダ(未然形、音便形、終止形) という分布になっている。歴史的には革新形である後者が前者に置き換わった結果であると考えられ、同様の交替が全国の方言で観察されるが、この過程は方言ごとに異なるものであったはずで、特に革新形のほうが方言差が大きい。たとえば、山陰を除く中国方言ではジャロ、ジャッ、ジャ、関西方言ではさらに音変化を経たヤロ、ヤッ、ヤが広く分布している。西日本の他の地域と同様に、ジャノヤ系統の語形が優勢な九州方言の中で、熊本県本土中部方言は、東日本と同様のダロ、ダッ、ダが分布している、という点でユニークである¹。しかし、これらの語形は東日本の語形からの借用とは考えにくく、東日本方言で起きたのとおそらく類似の、しかし熊本方言が独自に経た変化の結果生じた語形であると考えられる。

九州方言学会(1969: 188)は、肥筑方言、つまり、福岡県西部、佐賀県、長崎県、熊本県には「いいきり」の指定助動詞はないとする。これは、「これは高い山だ。」をどのように言いますか? という質問項目に基づいた分析である。この問題は、他の環境、たとえば助詞の前や準体助詞の後などでの助詞の分布と併せて指定助動詞の活用の問題として捉えなおす必要があるが、音形の違いに関わりなくこの地域の方言が共通の革新を経ていることを示すようである。

本稿では、九州の他の方言におけるこの指定助動詞の文法的特徴との比較により、熊本方言で起きたと考えられる変化について考察する。特に、「いいきり」の指定助動詞を欠くことと相関するように見える文末の終助詞パイおよびタイについても、簡単な史的再建を試みる。

比較・考察する対象は、以下のとおりである。

- (1) 指定助動詞終止形の分布
- (2) 指定助動詞連体形の分布、特に準体助詞との共起
- (3) 指定助動詞終止形と終助詞の用法

§ 2 . 繫辞としての指定助動詞

指定助動詞は、一般言語学的には繫辞 copula、連結動詞 linking verb と呼ばれる述語マーカーの一種だと見ることができる。日本語では、指定助動詞は、体言(「形容動詞」語幹を含む)、副詞、助詞に終わる句(後置詞句)のような活用をもたない形式に接続して述語化し、述語が表示すべき文法範疇をその活用によって示す活用語であるといえるだろう。用言は原則として指定助動詞を伴わずに述語になるが、活用形を欠いている部分を指定助動詞との構文で補う場合がある。丁寧助動詞マスが接続する活用形をもたない形容詞が丁寧指定助動詞デスと構成する構文や、未然形+助動詞ウでは区別されない、話し手の意思とは無関係な推量を示す用言+ダロウがこれにあたる。

1. 楽しかったです vs. *楽しいだった
2. 降るだろう vs. *降るだった cf. 雨だろう、雨だった

一般言語学的な意味での繫辞が、意味的には空で、基本的な機能として活用による文法機能マーキングを担う形態であることは、同じ活用のない述語であっても繫辞を伴わないで文が構成できる場合があることがよく示している。この場合、繫辞の欠如によって示されるのはデフォルトの文法機能マーキングであると考えられる。たとえば、テルグ語の名詞述語文は通常は繫辞を伴わないとされるが、これはデフォルトとみられる主文の肯定文の場合であり、文否定が原則として動詞形態によって表示されるこの言語では名詞述語文の否定辞は、繫辞として機能する動詞 ag-, aw-, ay-, gaa-, kaa-「成る、完了する」の特殊な否定活用形である。また、従属文ではこの動詞の不定形諸形(non-finite forms)によって主文との関係が表示されなければならない。以下では、繫辞としての用法の動詞形を太字で示す。

3. bhoojanam ay-indi=aa 「**食事**が終わったか? / ***食事**だったか?」
4. kamala DaakTaru awu-tuMdi=aTa
「**カマラ**は医者になるそうだ / ***カマラ**は医者だそうだ」
5. kamala DaakTaru **kaa-du** 「**カマラ**は医者ではない」
cf. kamala DaakTaru awa-du 「**カマラ**は医者にならない」

6. kamala DaakTaru **ay-tee** 「カマラが医者になれば / 医者であれば」
 7. DaakTaru **ay-na** kamala 「医者になったカマラ / 医者であるカマラ」
 しかし、同じく名詞文をマークする形式であっても、動詞形態によらない不変化マーカ
 ーであれば、文の種類に関わりなく同じ位置を占め、名詞文は繫辞を伴わないで現れる。
 8. bhoojanam=aa 「食事(だった)か？」
 9. kamala DaakTar=aTa 「カマラは医者だ(った)そうだ」
 10. kamala DaakTar=aMDi 「カマラは医者でございます」
 11. kamala DaakTar=ani telii-du 「カマラが医者だと知らない / 知らなかった」

8~10 は文末小辞、11 は、引用節マーカ-の例で、日本語の助詞に似ている。テルグ語の
 繫辞はこのような位置には現れることができない。

テルグ語の繫辞が意味的に空であることを示すもうひとつの根拠として、動詞の名詞化
 形を述語として主文にのみ現れる定形動詞文が存在することをあげることができる。この
 形式は、機能上は他の定形動詞文と変わらず、習慣過去時制や非現実法などの未完了相に
 属する時制・法を表示するが、形態論上は名詞述語文であるため、否定形には繫辞があら
 われる。

- 12a. kamala vacceedi. 「カマラがきたものだ / カマラがきたことだろう」
 12b. kamala vacceedi **kaadu**. 「カマラは来なかったものだ / カマラは来なかっただろう」

日本語の指定助動詞も、しばしば脱落しているように見える。これは特に(方言を含む)
 話し言葉において顕著である。言い換えれば、書き言葉形と比較した場合に、対応する指
 定助動詞が落ちているように見える表現が話し言葉に多いのである。

- 13a. ぼくドラエモン
 13b. ぼくはドラエモンだ

このような助動詞の脱落は、東京方言ではほぼ終止形のダに限られているが、単純に「脱
 落」と捉えられるかどうか慎重な判断が必要にみえる場合もある。特に、後続の助詞があ
 る場合のダの出現 / 欠如にはさまざまな要因が絡んでいるようである。

- 14a. 駅前に午後 3 時ね
 14b. 駅前に午後 3 時だね
 15a. これ、おみやげな
 15b. これ、おみやげだな
 16a. 晩御飯よ

- 16b. 晩御飯だよ
 17a. あたりまえさ
 17b. *あたりまえださ
 18a. *またぞ
 18b. まただぞ cf. まただぜ、まただわ
 19a. それはそうかもね
 19b. ?それはそうだかもね

意味の変更を伴わない「脱落」であるとすれば、脱落しない形は脱落した形よりも広い範囲で使われると考えられるが、14b が可能な場合は 14a の使える場合の一部であるし、15a と 15b はそもそも使用可能な場合が重ならないように見える。17、18 では、どちらが可能かの決定は文法的に条件付けられている。

特に、ダの出現が東京方言で何らかの（たとえば既定事実であることの強調というような）有標な意味特徴をもつように感じられる一つの大きな理由は、真偽判断が中立的な疑問文においてダが現れないことに求められるだろう。

- 20a. これで全部？
 20b. これで全部だ？（フザケルナ）
 20c. これで全部かな？
 20d. ?ほんとにこれで全部だかな？

中立的とはいえない疑問文でも助詞によってはダが出現できないので、ダの欠落自体は真偽判断の中立性に関しては無標であると考えなければならない。

21. ほんとにこれで全部か？

東京方言では、疑問詞疑問文に現れる終助詞の一部が平叙文と共通になるが、ダの出現についても平叙文にほぼ準ずる形になる。いずれもダの出現するものはそうでないものと比べて有標といえそうである。

- 22a. これ誰？
 22b. これ誰だ？
 22c. これ誰よ
 22d. これ誰だよ
 22e. これ誰さ
 22f. *これ誰ださ
 23a. どうかな？

23b. どうだかな？

日本語の指定助動詞の分布の中で、機能的にも他と異なりそうな特徴をもつのが、用言連体形に準体助詞や形式名詞が伴う句に接続する場合である。これらの文は、テルグ語の動詞名詞化形述語文と同様に、機能上はむしろ用言述語構文の一種と見なすことができ、たとえば音韻的に準体助詞や形式名詞が指定助動詞と結合している(例:東京方言 ンダ)、対応する否定文や疑問文を欠いている(例:東京方言 V-シタモンダ)といった、名詞文など他の非用言述語文とは異なる構文上の特徴があることも多い。

東京方言では、この場合でも、終止形ダの出現/欠如の条件は非用言述語文とほぼ同じであるといつてよい。指定助動詞を伴わない助詞ノはしばしば疑問文の末尾に現れ、話者によっては丁寧語の助動詞デス・マスに終わる文末で事実上疑問文をマークする終助詞としての用法に充てている場合もみられるが、基本的にはこの場合も準体助詞であって指定助動詞終止形が欠如した形式的な名詞文の一種であることは、疑問詞疑問文においてダを伴う形(ンダ)と対立することからも明らかである。

24a. 何してる？

24b. 何してるの？

24c. 何してるんだ？

24d. 何をしておいでですか？

24e. *何をしておいでですか？

25a. テレビ見てる

25b. テレビ見てるのさ

25c. テレビ見てるんだ

26a. すぐおこ(怒)んのな

26b. すぐ怒るんだな

東京方言の準体助詞文は命令文としても機能する。この場合も、ダの出現/欠如が何らかの意味的な違いを表示しているように見えるが、終助詞を伴わない場合と、ヨ、ダヨ、ダゾを伴う場合とで、出現/欠如に差があるようである。終助詞を伴わない場合は、ダが出現する命令文は肯定命令が普通であり、ダの否定形による禁止と対比される。終助詞を伴う命令文では否定の準体助詞文も可能であるが、ダが欠如してよいのはヨを伴う場合だけで、この場合平叙文(例文 16)と同様に、「女性語」的な表現になる。ダによる命令文マーキングは肯定文のみに、ダヨ、ダゾによる命令文マーキングは肯定文・否定文の両方に適用され、ダヨではダの脱落が「女性語」をマークしている、というような解釈が可能

であると思われる。ダヨ、ダゾによるマーキングは、基本的に終助詞による意味付加であって、ダは繫辞として現れているだけで意味的に空であると考えられる。

- 27a. 静かにするの
- 27b. 静かにするんだ
- 27c. 騒がないの
- 27d. [?]騒がないんだ
- 27e. 騒ぐんじゃない
- 28a. 静かにするのよ
- 28b. 静かにするんだよ / ぞ
- 28c. 騒がないのよ
- 28d. 騒がないんだよ / ぞ
- 28e. 騒ぐんじゃないよ / ぞ

以上、東京方言においても、話し言葉においては、非用言述語文では指定助動詞が欠如しているのが無標であり、指定助動詞は、有標な各活用を表示する場合や後続の助詞に応じて文法的に出現が条件付けられている場合、あるいは、無標の活用と考えられる終止形は、なんらかの意味的に有標な特徴を表示する場合に出現している、と解釈できることを示した。丁寧を表示する指定助動詞デスや書き言葉では終止形の場合でも欠落することができないため、話し言葉のダで可能な意味の区別が表示できない、ということになる。

§ 3 . 熊本方言における指定助動詞終止形

東京方言指定助動詞終止形ダの出現環境はまとめると次のようになる。

[A] 文法的に出現が条件付けられた助詞（接続助詞、引用格助詞、一部の終助詞）が後続する場合

[B] [A]以外の環境では、平叙文および疑問詞疑問文、準体助詞句述語命令文において何らかの意味的特徴（強調）が加わる場合

この出現環境は、関西方言終止形ヤでもおおむね一致するようで、たとえば東京方言では指定助動詞の欠如が「女性語」として有標になる助詞がある、というような方言ごとの差異はあるにせよ、ある程度広い地域の現代日本語諸方言に共通する特徴である可能性がある。しかし、熊本方言の指定助動詞終止形ダの出現環境は、ほぼ[A]の場合にだけであり、しかもその種類も著しく限られているようである。このことを、他の九州方言と比較

しながら述べていく。

先行する指定助動詞の出現が条件付けられている助詞として、もっとも目立つのは、順接の接続助詞ケン「から」である。ダケンの形は、指定助動詞としてではなく独立した接続詞「だから」としての用法も持ち、この用法でダとケンは不可分に一体化しているようにみえる。

29a. *あした休みけん

29b. あした休みだけん 「明日休みだから」

ただし、問題は果たしてこのダが終止形かどうか、ということである。たとえば、民謡『おてもやん』の有名な一節ではこのダケンがダルケンの形で現れる。

30. ご亭どんのぐじゃっぺだるけんまあださかづきゃせんだった

「亭主殿が痘痕もちなのでまだ盃はしていない。」

語源を考えればここにルが現れること自体は不思議ではないが、全国の大多数の方言の終止形で失われたと考えられる動詞由来のr音がかなり遅くまで残っている点で、動詞と同様な終止形と連体形の区別のない状態か、あるいは、このr音によって終止形と区別された連体形の存在した段階を仮定しなければならないことを示すようである²。後述するように、九州方言では古い指定助動詞連体形のナを欠いていたと考えられるが、このことは、ダ系列の連体形が存在していた可能性を示す。ダケンと同様に、ダが省略できない助詞連続としてダモン(ネ)があるが、これに対応する鹿児島方言の語形は、連体形と同形である。

31a. アシ[タ]ヤス[ミ]ジャー]モン]= ナ 「明日休みだものな」³

31b. アシ[タ]ヤス[ミ][ジャー][モン]=カ 「明日休みなものか」

これに対して、逆接の接続助詞バツテンは、ダあるいはダルに後続できないというわけではないにしても⁴、ダが出現しない用例のほうがふつうであるし、また、バツテン、ソギャンバツテン「そうだけど」のような語彙化していると見られる接続詞ではダが現れない。共通語と同形の接続助詞シは、共通語と同様に非用言文では必ずダが出現していなければならない。

終助詞では、共通語の流入が疑われるもの(ネ、ヨ)でダの出現が可能なほかは、ダが出現できない助詞ばかりである。

32a. 明日休みたいね? 「明日は休みだよね」

32b. *明日休みだたいね

- 33a. 明日休みばい 「明日は休みだよ」
 33b. *明日休みだばい
 34a. 明日休みど? 「明日は休みだろう?」
 34b. *明日休みだど

32 のタイ、33 のバイは平叙文のみ、34 のド (< *ラム) は真偽判断の疑問文にのみ現れる助詞である。

この点で、熊本方言は鹿児島方言と著しい対照を成す。35 の鹿児島方言の終助詞では、指定助動詞が必ず出現しなければならない。

- 35a. アシ[タ]ヤス[ミ]ジャツ]= ド 「明日は休みだぞ」
 35b. アシ[タ]ヤス[ミ]ジャツ]=サ 「明日は休みだよ」
 35c. アシ[タ]ヤス[ミ]ジャラ]=オ 「明日は休みじゃないか」
 35d. アシ[タ]ヤス[ミ]ジャー]=ガ 「明日は休みだろう」
 35e. アシ[タ]ヤス[ミ]ジャン]= ナー 「明日は休みですなあ」⁵

鹿児島方言で指定助動詞終止形が先行できない助詞は、疑問文形成の助詞群と、疑問文への回答に用いられるヨだけである。

- 36a. アシ[タ]ヤス[ミ]=ヤ 「明日は休み?」
 36b. アシ[タ]ヤス[ミ]=ネ 「明日は休み?」
 36c. アシ[タ]ヤス[ミ]=ナ 「明日は休みですか?」
 36d. アシ[タ]ヤス[ミ]= ケ 「明日は休みかな」
 36e. アシ[タ]ヤスミ]=ヨ 「明日が休みだよ」

熊本方言の平叙文で、指定助動詞終止形の出現・欠如が両方可能である場合は、先に述べたように、ダが終助詞に先行した形が共通語と同じになるダネ、ダヨがある。この場合、ダの付加が何らかの意味的な区別を表示しているとは考えにくい。

一方、疑問詞疑問文かどうかに関わりなく、疑問文において指定助動詞終止形が出現しないのは、熊本方言・鹿児島方言のほか、九州の広い範囲の方言で共通の特徴であるとみられる。

- 37a. それなん? 「それなに?」
 37b. それなんね 「それなに?」(身内/年下の者に)
 37c. そらなんか 「それは何だ?」
 38a. なんばしよっと? 「何してるの」

- 38b. なんばしよっとね 「何してるの」
 38c. なんばしよっとか 「何してるんだ」

39の鹿児島方言の終助詞は、39c. 以外は疑問詞を含まない疑問文に共通して用いられる。

- 39a. [ソ]ヤ[ナイ]=ナ 「それは何？」
 39b. [ソ]ヤ[ナイ]=ケ 「それは何かな？」
 39c. [ソ]ヤ[ナイ]=ヨ 「それは何だ？」
 39d. [ソ]レ[ナン]=ネ 「それ何？」
 39e. [ソ]レナ[ニ] 「それ何？」

このため、疑問詞疑問文においてもダの付加によって意味的区別を表示することはない。したがって、東京方言の[B]に対応する用法は見当たらない。

熊本方言の準体助詞は、九州の隣接地域同様にトであるが、トに終わる準体助詞文を用いる命令文では終助詞バイが必要である。また、否定形の準体助詞文も同様に命令文に用いられる。

- 40a. はよ帰るとばい 「早く帰るんだよ」
 40b. ぐずぐずせんとばい 「ぐずぐずしないんだよ」
 40c. はよ帰るばい 「早く帰ろうよ」

一方、鹿児島方言では準体助詞+指定助動詞の組み合わせに終助詞を付加したトジャツド(縮約してタツド)が命令を表す。この形も、否定文命令にも使われる。指定助動詞否定形は命令文(禁止)には使えない。

- 41a. ハ[ヨ]モ[ドッ]タツ]=ド 「早く戻るんだぞ」
 41b. ウロ[ウ]ロ[]センタツ]=ド 「うろうろするんじゃないぞ」
 cf. *ウロウロスツトジャナカド
 41c. ハ[ヨ]モ[ドッ]=ド 「早く戻るぞ」

準体助詞句述語命令文で命令をマークしているのは、熊本方言・鹿児島方言とも終助詞のようにみえる。指定助動詞終止形が熊本方言では現れず、鹿児島方言では必須であるという違いは、両者の助詞の性質から予測できる。指定助動詞終止形のみで命令をマークする用法はどちらの方言にもない。

このように、東京方言での指定助動詞終止形ダの出現環境のうち、[B]は、熊本方言だけでなく、ある程度広い地域の九州方言が共通して欠いている環境であるとみることができ。歴史的にみて、九州方言の指定助動詞がこれらの環境での用法を失ったと考えるべきか、あるいは中央日本で起きた革新が九州まで及ばなかったと考えるべきかは、もっと

広範囲な方言比較が必要であるように思われる。ただ、特に出現環境 [A] における熊本方言と鹿児島方言の比較を考慮に入れると、熊本方言は、全体として指定助動詞の終止形の出現環境を減らし、テルグ語のような、無標の繫辞が音形ゼロとされる言語にさらに近づいているように見える。実は、このような方向性を実際に裏付けるような変化が、狭義の、つまり非用言述語に伴う「繫辞」の用法以外の指定助動詞の用法に観察される。

先に述べたように、指定助動詞の未然形ダロ（ウ）は、用言の活用形を補う形の構文を構成する。九州方言でもこの未然形の用法が広く観察されるが、熊本方言を含む九州北西部の方言では、音便形ダッ（タ）、ジャッ（タ）も同様に、動詞否定形の過去の活用を補う用法を獲得しているとみられる。

九州方言の動詞否定過去形はおそらく本来は動詞未然形 + ズあるいは動詞未然形 + ズ二、ズテの否定連用形（例：鹿児島方言ンジン）に動詞アリの音便形が組み合わさった形に由来するとみられ、指定助動詞とは起源が異なる。しかし、動詞未然形の部分が否定終止形のンと同形に変化した結果、多くの方言で、分節音レベルでは動詞否定過去形と否定終止形 + 指定助動詞過去形が同形になったと考えられる。鹿児島方言もそのような方言の一つであるが、この方言では否定過去形は全体として1アクセント単位を成しており、必ず直前に前にアクセント単位の境界をもつべき指定助動詞過去形ジャッタを含んでいるという解釈は、音韻上不可能である。

42a. イラン[ジャッ]タ 「要らなかった」

42b. [イ]ランジャッタ 「イランだった」

これに対して、熊本方言では否定過去形のダッタも指定助動詞過去形ダッタも、ともに低く接続し、否定過去形を否定終止形 + 指定助動詞過去形と解釈することを阻む音韻的根拠はない。

43a. 要らん]だった 「要らなかった」

43b. イラン]だった 「イランだった」

九州方言学会(1969: 162-165)の文法地図では、年長世代では指定詞のダと動詞否定過去のンダッタはほぼ重なる分布になっている。このことは、二つの語においてジャからダへの共通の変化が起きたと考えるよりは、むしろ両者が同じ語であると話者が判断していた段階があったと考えたほうが説明しやすい。この場合、動詞否定形はそれ自体は活用しない語であり、指定助動詞の活用形との構文によって否定活用が構成されている、という状態となる。動詞否定形だけでなく、これに由来する助動詞形でも同様の活用構文が現れる。

44a. 要らん + だろ 「要らないだろう」

44b. 要らん+だった	「要らなかった」
44c. 要らん+なら	「要らないなら」
44d. 要らん	「要らない」
45a. せなん+だろ	「しなければならないだろう」
45b. せなん+だった	「しなければならないかった」
45c. せなん+なら	「しなければならないなら」
45d. せなん	「しなければならない」

ここで、否定活用の非過去終止連体形は、活用の点では無標であり、指定助動詞は現れない。つまり、否定活用が繫辞による活用であるとすれば、無標の繫辞はゼロとなっているわけである。

この否定活用と、非用言述語文とでは、たとえば接続助詞ケン、シや終助詞モンの前でダが現れるかどうかの点で違いがある。また、否定活用過去形では、九州の他の地域と同様にダッタがカッタに置き換わる変化が進行していることも、否定活用と非用言述語文の繫辞を同一視できない証拠といえる。しかし、形容詞文なども含め、丁寧終止形が(不変化の)デスによってマークされる活用として、指定助動詞の繫辞化、終止形の無標化が進んでいる活用グループとみなすことは妥当であると考えられる。

46a. 要らん+です	「要りません」
46b. 要らん+だった+です	「要りませんでした」
46c. 要りまっしえん	「要りません」
46d. せなん+です	「しなければなりません」
47a. 太か+です	「大きいです」
47b. 太かった+です	「大きかったです」

§ 4 . 熊本方言における指定助動詞連体形

東京方言においては、指定助動詞の連体形は保守形のナ(<ナル)が維持されているが、この形の分布は、いわゆる形容動詞とその他の非用言述語で異なっている。形容動詞の場合、連体修飾位置では一貫してこのナが現れ、このことが形容動詞を品詞として立てる場合の形態論上のもっとも重要な基準となっている。他の非用言述語は、通常の連体修飾位置においては、文の連体修飾関係においても格助詞ノの分布が広く、連体形ナの分布は準体助詞を中心とする一部の形式名詞を修飾する場合に限定される。

48a. 三時までの会議

48b. 会議は三時までの予定

48c. 会議が三時までなこと知らなかった？

48d. 会議が三時までなの忘れてた

形容詞接辞カの生産力がかなり遅くまで保たれたとみられる九州方言では、東京方言で形容動詞として活用するかなりの語が終止連体形で接辞カを伴う語として用いられる。この場合、これらの語群は用言述語となり指定助動詞には接続しない。

49a. きれーか ふまじめか ぶあいそか りこーか (終止連体形)

49b. 好き 嫌いな 不自然 国際的 (いずれも連体形は+ナ)

つまり、保守的な形であるはずの連体形ナは、比較的新しい語に分布が限られており、形容動詞連体形の語形そのものの借用である可能性が強い。一方、東京方言で分布が限定される、非用言述語に接続するナは、九州方言の場合、おそらく動詞的性質を遅くまで残し、終止連体形の形で連体形にも進出した革新形によってさらに分布を狭められたと考えられる。以下は鹿児島方言の例である。

50a. アシタ[ワ]ヤス[ミ]ジャッ]]ハッ]ジャッ]= ド 「明日は休みであるはずだよ」

50b. アシタ[ワ]ヤス[ミ]ジャッ]]テ (]テ = 準体助詞与格) 「明日は休みなのに」

指定助動詞の保守形のうち、仮定形のナラはほぼ九州全域に安定して維持されているのに対し、連体形ナのほうはきわめて不安定である。共通語からの借用が疑われない用法としては、準体助詞としてノ、ンを使用する北東部に、東京方言と平行的なナンの形が見られる程度である。

51a. 明日休むん？ 「明日休むの？」

51b. 明日休みなん？ 「明日休みななの？」

51c. 明日休むんよ 「明日休むんだよ」

51d. 明日休みなんよ 「明日休みなんだよ」

では、このナに対応する形は、準体助詞にトを用いる地域では何だろうか。鹿児島方言の場合は、指定助動詞の終止連体形になる。

52a. アシ[タ]ヤ[スン]]ト 「明日休むの？」

52b. アシ[タ]ヤス[ミ]ジャッ]]ト 「明日休みななの？」

52c. アシ[タ]ヤ[スン]]ト 「明日休むんだ」

52d. アシ[タ]ヤス[ミ]ジャッ]]ト 「明日休みなんだ」

52e. アシ[タ]ヤスン]]ト=ヨ 「明日、休むんだよ」

52f. アシ[タ]ヤスミ]ジャッ]]ト=ヨ 「明日が休みなんだよ」

熊本方言の場合、少なくとも若年層では、終止形の場合と同様、準体助詞の前には指定助動詞が現れない。つまり、鹿児島方言の指定助動詞の終止連体形に、指定助動詞の欠如が対応する、という規則性が観察される。

- 53a. 明日休むと? 「明日休むの?」
 53b. 明日休みと? 「明日休みななの?」
 53c. 明日休むとばい 「明日休むんだよ」
 53d. 明日休みとばい 「明日休みなんだよ」

準体助詞の機能が、非体言句が体言出現環境に現れることを可能にすることであるとすれば、体言に直接準体助詞が接続するのは奇妙であるが、この構文では、助詞トが音形のない繫辞の存在、つまり、先行する体言が述語であることをマークしていると理解すべきである。準体助詞のもうひとつの出現環境である代用表現用法では、連体修飾を明示するマーカが必要であり、体言と準体助詞トの直接の接続は不可能である。東京方言の準体助詞ノが体言に直接接続するのはこちらの場合であり、音形がゼロになるものは逆であるが、東京方言でも熊本方言でも準体助詞に対する連体修飾の機能分化が行なわれているという点では同じ現象であるとみなすことができそうである。

- 54a. 三時までと 「三時までなんだ」
 54b. 三時までんと 「三時までの(もの)」
 54c. 明日休みんと 「明日休みの(人、もの)」

連体形接辞ナをとる形容動詞語幹の場合も、準体助詞の前にナが現れるのは代用表現用法に限られ、準体助詞文では繫辞ゼロとなる。

- 55a. これ好きと 「これ好きなんだ」
 55b. 好きなと取って 「好きなのって」

非用言述語 + 準体助動詞の連続のあとには、ほぼ通常非用言述語と同様に助詞が接続する。

- 56a. 休みとばってん 「休みなんだけど」
 56b. 休みとたい 「休みなんだよ」
 56c. 休みとだけん 「休みなんだから」
 56d. *? 休みとど cf. 休みとだろ 「休みなんだろう」

前節で述べたように、ダケン、ダモンのダ(<ダル)は、熊本方言における指定助動詞の終止連体形の化石化した用法である可能性があるが、この語形が準体助詞の前に接続した痕跡はなさそうである。このことは、終止連体形の脱落が一気に起きたのではなく、ま

ず準体助詞の前の繫辞が繫辞終止形と合流し、先に脱落した可能性を示唆しているかもしれない。

他の九州方言との比較で興味深いのは、指定助動詞が「言いきりの形をとらないのが普通である（九州方言学会 1969: 275）」とされる「肥筑方言」のうち、ジャ系列の指定助動詞が現れる地域でしばしば観察される、準体助詞と指定助動詞の融合形ツチャである。この形が指定助動詞に由来することは未然形ツチャロが存在することや、未然形以外は平叙文にしか用いられないことから明らかであるが、指定助動詞終止形のジャ（ヤに移行した地域が広い）が単独で現れない方言でも、融合形終止形ツチャは現れることが多い、という点である。この形は、名詞にも直接接続し、準体助詞の直前の繫辞は熊本方言と同様にゼロとみなされることになる。

57a. 明日休むっちゃ 「明日休むんだ」

57b. 明日休みっちゃ 「明日休みなんだ」

鹿児島方言では、同じ組み合わせの融合形タツ]（未然形タロ）が現れるが、この融合形は非用言述語に接続する場合には指示助動詞終止連体形ジャツ]に接続しなければならない。また、終止形は終助詞が接続する場合にのみ現われる。

58a. アシ[タ]ヤ[スン]タツ]=サ 「明日休むんだよ」

58b. アシ[タ]ヤス[ミ]ジャツ]タツ]=サ 「明日休みなんだよ」

このような融合形は熊本方言では観察されず、用言過去形や力語尾形容詞の後の音便形ツダを除くと、縮約しないトダの連続のみが現われる。この場合でもトダあるいはツダで言い切る形はない。あるいは、準体助詞に終助詞タイが接続した形であるツタイ（またはツタイ）と合流した可能性があるが、そうだとすれば、本来活用語の活用形であったものが不変化語に置き換わったことになる。

§ 5 . 指定助動詞終止形と終助詞バイ、タイ

九州方言学会(1969: 275)は、肥筑方言において指定助動詞が言いきりの形をとらないことを述べた上で、文末詞「バイ」「タイ」が「共に体言に直接して、指定助動詞に代わりうる程度の、指定の効果を示している」とする。ここでいう「指定の効果」とは何であろうか。ここでは、上述[B]の東京方言話し言葉において指定助動詞の出現によって「平叙文および疑問詞疑問文、準体助詞句述語命令文において何らかの意味的特徴（強調）が加わる場合」に相当するものとして考察する。

59a. これおみやげ

59b. これおみやげだ

60a. 僕はうなぎ

60b. 僕はうなぎだ

61a. これ何？

61b. これ何だ（？）

62a. どうなってるの？

62b. どうなってるんだ（？）

これらの組み合わせに共通するのは、59-62a はたとえば 59a や 60a が一種の遂行文のような響きをもち、必ず聞き手が存在することを予想させるのに対し、59-62b は独り言としての解釈も可能である、ということのように思われる。とすれば、疑問文のうち、真偽選択の疑問文で指定助動詞が現れないのは、明示的に自問でない限りはこの種の疑問文は真偽を判断できる聞き手が存在していることを前提としての発話であることに結び付けられるだろう。また、準体助詞句述語命令文も、命令文の中では独り言として、つまり自分自身に対する言い聞かせの表現としてもっともなじみがいいように思われる。

63a. 落ち着くんだ

63b. 焦るんじゃない

このように考えると、書き言葉において指定助動詞の省略が避けられるのは、文体の問題はあるにせよ、書き言葉は通常はその場に読み手を想定していない、という場面の特殊性にも結び付けられそうである。

実は、熊本方言の終助詞パイとタイは、非用言述語に接続した場合に、共にこのような独り言の用法をもつ助詞である。聞き手がいる場合は、さまざまな文末イントネーションとの組み合わせで出現し、それぞれさまざまな機能をもつが、独り言の場合は助詞は低いのが普通である。

64a. 今日は休みばい 「今日は休みだよ」

64b. 今日は休みたい 「今日は休みだよ」

独り言の場合は、何らかの手段で話し手自身が事実と確認した場合にパイが、推定した場合にタイがふさわしい。聞き手がいる場合には、聞き手が知らないと話し手が判断した場合にパイが、聞き手も知っているべきだと話し手が判断した場合にタイが使われることになる。パイ、タイの両者とも、平叙文でのみ現われ、疑問詞疑問文でのダの用法はカバーできない。これに対して、命令文として用言に接続する用法はある。

65a. 練習すっばい 「練習しよう」

65b. 練習すったい 「練習するんだ」

65c. 練習すっばい 「練習するんだよ」

バイを使う場合は、話し手を含む主語の動作を促す命令文である。聞き手がいなければ独り言としても使用可能である。これに対して、タイを使う場合は話し手を含まない聞き手のみの動作を促す命令文である。聞き手がない場合には、命令というよりは練習するのが客観的にみて当然である、というような当為を表わす表現になる。一方、バイが準体助詞述語文に接続する場合は、話し手を含まない聞き手の動作を促すことになり、この点でタイに近い。ただ、バイがあることにより、聞き手による動作の実行を話し手本人が希望しているというニュアンスがはっきりと出る。

このように、終助詞タイとバイが、東京方言では指定助動詞終止形ダの出現によってマークされる用法を、ある程度までカバーしていることは見てとれる。ただし、これらの終助詞は、非用言述語文にも用言述語文にも等しく接続する助詞であり、指定助動詞とは重ならない用法をもっている。聞き手の存在に関わりなく使えることは、文の種類を問わない。

66a. 今日は休んだばい 「今日は休んだよ」

66b. 今日は休んだたい 「今日は休んだよ。(忘れたの? / たぶん)」

66c. 今日は休んだとばい 「今日は休んだんだよ」

66d. 今日は休んだったい 「今日は休んだんだ。(そしたら・・・ / たぶん)」

つまり、指定助動詞そのものではなくむしろ、終止形に接続する何らかの助詞にタイとバイの対応語を求めるべきなのである。東京方言でも、(ダ)ワ、(ダ)ヨ、(ダ)ゾ、(ダ)ナなどの助詞は、助詞の接続しないダと同様に、聞き手の有無に関わりなく使用できるし、ダと異なり、用言述語文にも接続できる。鹿児島方言の(ジャッ)=ド、ジャラ=イ<(ジャッ+)アイ、(ジャー)=ガでもそうである。タイとバイのこれらの方言の終助詞との違いは、接続すべき指定助動詞終止形が欠如していることなのであって、これらの助詞自体が助動詞の機能を引き継いでいるわけではない、ということに注意が必要である。

通時的な解釈の問題としても、熊本方言では助詞バイとタイが存在するために、指定助動詞の[B]のような用法が発達しなかった、という説は成り立たない。東京方言でも、タイやバイに近い用法の終助詞が存在しているが、そのこと自体は東京方言で指定助動詞が終助詞を伴わない用法で用いられることに何の妨げにもなっていないし、また、助詞タイやバイが存在しない鹿児島方言でもやはり指定助動詞の[B]のような用法は発達していないのである。鹿児島方言の指定助動詞終止形ジャッも、終助詞を伴わない「言いきり」の

形で出現するのは不自然である。先行する助動詞終止形の出現・欠落の対立がある助詞もあるが、助動詞の有無に関わらず独り言と解釈できる点で東京方言と異なる。

67a. [コイ]ガオミヤ[ゲ]= ネ = 15a, 15b

67b. [コイ]ガオミヤ[ゲ]ジャッ]= ネ = 15b⁶

むしろ、熊本方言では、指定助動詞終止連体形がなくなってしまったため、無標の非用言述語文がもつ「聞き手が存在する」という解釈を打ち消すためには終助詞が必須になった、と考えるべきなのであるが、ここで浮かび上がるのは、実は指定助動詞終止連体形だけが失われたのではなく、これに接続していたであろう他の終助詞もことごとくなくなっている、ということである⁷。結果的に、指定助動詞終止連体形に接続しない終助詞パイとタイだけが生き残ることになった、というように見える。指定助動詞終止形に接続する助詞が本州方言と鹿児島方言に共に多数存在していることは、おそらく熊本方言にもそのような助詞が存在したことを予想させるが、この段階ですでに、パイとタイは指定助動詞終止連体形を必要としない助詞であったと考えられるのである。

終助詞パイ、タイに接続する終助詞が非常に少ないことも、パイとタイが指定助動詞そのものに対応しているような印象を与える理由である。パイとほぼ融合しているとみられ待遇表現的な機能が加わるとみられるパイタ、バナのような形を除けば、確認できたのは終助詞ネ、ナだけである。通常低く接続する疑問の終助詞ネと異なり、この組み合わせでは常に低いタイやパイに対し、より高く接続する助詞である。

68a. これがおみやげばい 「これがおみやげね」

68b. これがおみやげばいね 「これがおみやげだな」「これがおみやげだよね」

68c. これがおみやげたいね 「これがおみやげだよ」「これがおみやげだね」

68a は、話し手が聞き手の予期しないおみやげをわたす場合、68b は、独り言で「これがおみやげだな」と確認する場合や聞き手と共に「おみやげだ」という推量を確認しあう場合に用いられるが、68c は、聞き手が存在する場合は 68b とも重なるさまざまなタイプの確認に用いる。たとえば話し手が聞き手に約束したおみやげを持ってきた場合も含む。聞き手が存在していなければ、「これがおみやげだろうな」というような推量になる。

終助詞パイとタイは、肥筑方言に広く分布する助詞であり、用法にも地域的なばらつきがあることが予想される⁸。したがって、これらの終助詞の歴史を再建するためにはもっと詳細な比較分析が必要になるのであるが、本論では、指定助動詞終止形に対する接続、という一点だけに絞って簡単な仮説を提示し、まとめに代えることにする。

終助詞バイのほうは、近隣の方言に同系語が容易に見出される。九州方言学会(1969: 208)は、福岡県豊前地域でワイの語形があることを示し、ワイは指定の助動詞に続く、とする。鹿児島方言には母音ではじまるアイ、アオの終助詞があり、先行する用言と音韻的に融合する。指定助動詞に接続する形は、ジャラ]=イ、ジャラ]=オである。さらにこの助動詞は係助詞ハに遡るとされる本州方言のワ、あるいはワにさらに助詞が接続したワヨとも同系であると考えられる。この対応は、バイのより丁寧な形としてバナが存在していることによっても補強される。終助詞ワナの連続は、本州方言でも珍しくない。この分布から考察される現在のバイの成立に至る変化は、

I) *ワ>バあるいは*ハ>バの変化

II) バの前の指定助動詞の欠落、つまり、用言述語文に接続するときの語形と非用言述語文に接続するときの語形の区別の喪失

である。IIは、もしも類推が関与せず、単に音変化として進行したと考えるならば、先行した段階に仮定される非用言述語文の形を*X+*ワイとした場合に、繫辞に相当する部分である*Xが非常に短かったことを示唆している。

終助詞タイのほうは少し想像を逞しくしなければならない。本論では、バイとタイが多くの方言で並行しかつ音形も対応すること、意味の点でもかなり共通していることを根拠として、タイとバイが共通の部分をもつ形に遡る、と仮定して再建をおこなってみる。バイが*X+*ワイであるとすれば、タイは*Y+*ワイであった、と考える。*Yは、用言述語文にも非用言述語文にも接続できる形でなければならず、かつ、変化してt音になることが想定できる音形でなければならない。実は、この*Yの条件をみたく助詞がある。引用の助詞トである。

引用の格助詞トは、中古語の指定助動詞としてナリに並ぶタリと密接に関係すると考えられる。ナリが連用形ニと動詞アリとの縮約であるのに対し、タリは連用形トとアリの縮約であるが、この連用形トは、現代語では「堂々と、黒々と」のように引用の格助詞としてのみ残存していると考えられる。もしも上記の再建形の*Xと*Yがアリを伴わない指定助動詞の連用形ニとトに遡りうるとすれば、終助詞バイとタイの成立はかなり古いことになるだろう。ニテの形に由来するデに早々に駆逐されてしまったと考えられる連用形ニが、単独で終止する用法を保っていたとは考えにくいので、*Xの再建はほかの可能性を探る必要があると思われるが、*Yが引用のトに由来すると考えれば、タイの分布が他の終助詞のあとなどかなり広いことも説明がつけやすいと考えている。この点については機会があれば稿を改めて論じてみたい。

以上、熊本方言では指定助動詞の終止連体形に相当する語形がほぼ完全に失われ、テルグ語のようなタイプの、繫辞がデフォルトでは音形をもたない言語に近づく変化を経ていることを述べた。周辺の方言で鹿児島方言のように終止連体形を保持しているものでも、その出現は特定の終助詞と結合する場合に限られており、この状態から、熊本方言では終止連体形とだけでなく終止連体形を要求する終助詞の多くが消えたのだと考えることができる。中には終助詞バイ、タイや、準体助詞ト、推量の助動詞ラムに由来すると考えられる終助詞ドなど、終止連体形がなくなったあとも保持された助詞があるが、これらの多くは本来は終止連体形を要求する助詞であったと考えられ、どの段階でどのような過程（いずれかに対する類推あるいは音変化あるいは借用）を経て終止連体形を要求しない助詞となったのかという問題も残る。この問題を解くためには、さらに九州の広範囲な方言についての調査が必要になると考えられる。

注

- 1) 九州方言学会(1969: 275)によれば、九州ではほかに佐賀北部東松浦地方にダ系の語形が分布する。
- 2) 近隣方言で指定助動詞未然形以外の活用形でr音が現れる例として、鹿児島方言では母音にはじまる終助詞に接続する場合のジャラ]=イ、ジャラ]=オ 「ではないか」(cf.]セン「しない」>セン]ナ=イ、セン]ナ=オ 「しないではないか」)がある。<ジャル+ワ+ヨ?
- 3) 以下、鹿児島方言の用例のみカタカナで表記し、句音調(上げ)[、アクセント核(下げ)]、文末イントネーション境界=、および文末イントネーションを表記する。文末イントネーションは、無標(B型の語末核のあとで低く、A型次末核のあとで平らに接続)、(B型の語末核のあとでやや低く、A型次末核のあとでやや上昇)、(A、B型ともに先行音節より高く接続)の3種を区別し、下降調の場合は最後に「？」を付した。東京方言・熊本方言については、文末上昇調イントネーションのみを「？」によって示すにとどめた。疑問文でも文末イントネーションが低の場合があるが、この場合は無印である。
- 4) バッテン自体は九州北西部に広く分布する語であるが、ダからの接続については地域差や世代差を考慮する必要があるかもしれない。インターネットの検索ではダバッテンの用例もある程度みられる。また、漱石の『我輩は猫である』では、佐賀県唐津出身の登場人物多々良氏に「愚だばってん」と言わせている。
- 5) 鹿児島方言の指定助動詞は、ジャツ/ジャンス(ジャン、ジャス)が±丁寧で対立する。35a-dの語例ではジャンド、ジャンサ、ジャンサオ、ジャンガが対立する語形である。35eのナは+丁寧の終助

詞でありジャンナのみが可能。

- 6) 67b は、お土産をもって来た人はその場にいないように聞こえる。67b のネは、下降調で長い実現ネーも可能であり、67a の短いネとは別の助詞であると考えられるべきかもしれない。なお、鹿児島方言をはじめとする南九州方言では、指定助動詞が本動詞として「そうである」という意味で単独で用いられる。この語は、その意味上、通常は応答語であって先行する真偽判断文を必要としている。指定助動詞としての用法でも、32b で例を挙げた[ジャッ]のように句音調を伴った発音では応答として当否を強調しているように聞こえるが、本論ではそのような特殊な用法は除いてある。
- 7) 肥筑方言の中には、鹿児島方言の(ジャー)ガに対応する(ヤ)ガを保っているものもあるが、熊本方言には対応するダガがないようである。
- 8) たとえば、子供の囃し言葉「先生に言うてやろう」に先行する部分は九州の中でも「知らんたい、知らんたい」である地域と「知らんばい、知らんばい」である地域があるようである。

[参考文献]

九州方言学会(1969)『九州方言の基礎的研究』風間書房